

## 第1章 本書の成立と保谷民博資料の来歴について

飯田 卓

国立民族学博物館

本書であつかう財団法人日本民族学協会附属民族学博物館（以下「保谷民博」と表記）の旧蔵資料は、国立民族学博物館（以下「民博」と表記）が設立以来受けいれてきたさまざまな資料のうち、もっとも核心的といってよい資料群（コレクション）である。このコレクションはこれまで、「旧文部省史料館資料」（吉田 1999; 宇野 2000）とも「アチックミュージアム民具コレクション」（近藤編 2001）とも呼ばれてきた。今回あらたに別称を採用するのは、この名称がコレクションの性格をもっとも適切に示すと、編者たちが合意したためである。このことについては、資料の来歴とともに後述したい。本書は、2013年8月に物故した近藤雅樹民博教授がこのコレクションについて進めてきた整理作業をふまえて、あらたに判明したことがらを報告し、より広範な便宜に供することを目的としている。

### 1. コレクションの来歴——1912年から1942年まで

保谷民博旧蔵資料は、創設直後の1975年に国文学研究資料館史料館（1972年までは文部省史料館、現在は人間文化研究機構 国文学研究資料館に統合）から民博が受け入れたもので、その数は約21,000点にのぼる。これは、民博の標本資料34万点（2015年3月現在）のうちでも大きな比率を占めており、2013年に時代玩具コレクション（約56,000点、大阪府指定有形民俗文化財）が受けいられるまで、最大の点数を誇っていた。数だけではない。日本に集まった民族学資料を一堂に集め、博物館展示として公開するという民博の社会的使命は、この保谷民博旧蔵資料なくしては生まれなかった。その意味でも、このコレクションは、民博が現有する資料のなかでも中核を占めるといえる。

コレクションのなかで、現在判明しているもっとも古い収集年をもつ資料は、1905年に集められたことになっている。和歌山県の高野山から集められた「楊枝」（標本資料番号H0013715）である。しかしこれ1点だけで、次に収集年が古いものは、1912年に集められている。おそらくこの頃から、1962年頃までの半世紀をかけて、コレクションは成長していった。

その初期の立役者が、民族学や民具学、日本民俗学において大きな業績を残した渋沢敬三（1896～1963）である。彼は、実業家としての顔をもつほか、終戦直後の大蔵大臣としてGHQの指導する経済改革を推進するなど、多彩な仕事を残している（佐藤 1987; 渋沢 1966; 佐野 1996; 刈田 2002; 宮本 2008; 鈴木 2010; 岩井 2011; 丸山 2013; 大谷

2015)。生物学を志していた彼は、家督を継ぐために初志を曲げることを余儀なくされたが、博物学的な興味をそそるものを持ちよる会合を同志とともに開くようになった。また、厩舎として建造した建物の屋根裏にこうしたものを陳列し、「アチックミュージアム（英語で「屋根裏の博物館」の意）」と呼ぶようになった。コレクションを「アチックミュージアム民具コレクション」と呼ぶのには、このあたりに理由がある（近藤 2001; 国立民族学博物館監修 2013）。

ただし、初期のコレクションは民具でなく、玩具が中心である。陳列室は1918年頃、渋沢が東京帝国大学に在学していたときにできたらしく、1921年頃には、同志たちの集まりも同じアチックミュージアム（あるいはアチックミュージアムソサイエティ）という名で呼ぶようになった。会合の記録をとるようになったこの頃、渋沢は25歳で、東京帝国大学経済学部を卒業する直前である。この直後に渋沢がイギリスへ渡航したため、会の活動は一時中断するが、1925年の帰国後には活動が再開され、渋沢はますますコレクションに情熱を傾けるようになった。1927年には藤木喜久磨が資料整理に携わるようになり、コレクションはもはや遊びにとどまらず、研究としての性格を強めていった。

1930年代、奥三河地方の花祭に対する関心を契機として、渋沢は民族学研究と博物館経営を一体のものともみなすようになっていく。これにともない、コレクションの対象は玩具から民具（この用語も渋沢とその仲間による命名といわれる）へと移行した。花祭の研究は、民具収集、書籍公刊と博物館展示の公開、写真と動画による記録といったさまざまな方法論と結びついたほか、地域の発展という明確な目的のもとに進められるようになり（鈴木 2010; 飯田 2014）、収集に関係する研究者の数も増えていった。

このコレクションを適切に管理し活用すべく、渋沢は、1934年にあたらしく設立された日本民族学会（のちの財団法人日本民族学協会）と強く関係するようになった。実業によって得た利益の一部を学会に寄付するかわりに、学会における民具研究の育成を認めさせたのである。1936年に渋沢は、その4年後に予定されていた日本万国博覧会に合わせて博物館を設立し、アチックミュージアムが集めた資料を国に管理してもらう計画を立てた。日本民族学会の重鎮も、国に対して建議をおこない、その実現に努めた。残念ながら博覧会自体が中止になってしまったが、1937年に渋沢は、広大な土地とともにコレクションを学会に寄贈した。

渋沢が寄付した保谷村（現在は西東京市）の敷地で、日本民族学会は附属民族学博物館（保谷民博<sup>1)</sup>を1937年に創設した（展示の一般公開は1939年5月21日以降）。同時に、博物館を利用しながら研究をおこなう附属民族学研究所も開いた。そのための人件費はすべて渋沢が賄ったという。学会事務所も、東京市芝区（現在は港区）三田綱町から保谷村に移された。すでに日中戦争が始まっており、博物館はさまざまな運営上の障壁に直面したが、幅広い学会員たちからの寄付によってコレクションは成長していった。日本各地のみならず、当時日本領だった樺太や千島列島、朝鮮半島、台湾、ミクロネシア、

そして中国大陸などからも、多数の資料がこの時期に加わっていった。

したがって、本書が対象とするコレクションは、アチックミュージアムからうけ継いだものだけではない。管理主体がアチックミュージアムから保谷民博に変わった後の資料も含めて、保谷民博旧蔵資料と呼ぶのはこのためである<sup>2)</sup>。

## 2. コレクションの来歴——1942年から1975年まで

1942年、学会の改組により、博物館も針路変更を余儀なくされた。この年、文部省直轄の民族研究所が設立されたのにもない、日本民族学会は、民族研究所を補佐することを目的とした財団法人日本民族学協会に生まれかわった。学会事務所は、民族研究所のある東京市内の赤坂区霊南坂に移され、学会附属の民族学研究所は廃止された。博物館とコレクションは1943年に日本民族学協会にあらためて寄贈されたが<sup>3)</sup>、建物の移築やコレクションの移動はない。日本民族学協会は、博物館の健全な運営をめざして17名の博物館運営委員と65名の協議委員を任命したが、博物館疎開を話しあうために1度召集されただけだったという（財団法人民族学振興会 1984）。疎開はけっきょく実現しなかった<sup>4)</sup>。開館当時から日曜日だけの開館だったというので、戦時色が深まってからの来館者は少なかったと思われるが、細々と公開してはいたらしく、日本民族学協会の学会誌『民族学研究』には「昭和19年春には疎開受入れのために公開陳列を中止し、博物館自体は全く閉鎖の止むなきに至った」とある（無記名 1957）。つまり1944年に建物が疎開のために流用されるようになったのだが、さらに後年の記録によると、1945年1月に博物館の建物が東京師範学校附属小学校の疎開先となったと記録されている（財団法人民族学振興会 1984）。この2つの疎開が同じで一方の年代が誤りなのかどうか、現在のところ不明である。

戦後、幣原喜重郎内閣の大蔵大臣に就任した渋沢は、みずからが実施した政策によって一部の資産の凍結を余儀なくされた。しかし、学会の財産としてのコレクションを守ろうとする意志は、私財への執着よりもはるかに強かったようである。官立の民族研究所が閉鎖されてその軀から自由になった日本民族学協会の会長に就任したのも、協会の立てなおしをめざしてのことだという（宮本 2008: 276）。

渋沢は1946年から1951年までの5年間、公職を追われて一時的に比較的静かな生活を送る。保谷民博の再公開の準備もこの頃に進んだ。アチックミュージアムの同人だった宮本馨太郎が中心となり、『民族学博物館彙報』（1949～1953年）および『民族学博物館館報』（1951～1959年）が刊行されるようになり、野外展示のための民家移築も進行了。『民族学博物館学生文庫』という小冊子シリーズの刊行により、一般への知識普及もはかっている（宮本 1952; 額田 1953）。1952年、博物館法の施行と同じくして、保谷民博は正式に公的登録を受け、同年5月1日に一般公開にこぎつけた（国立民族学博物館

1984)。

1950年代、保谷民博は、あたらしい文化行政と連動しながら活発化していった。1954年には、日本民族学協会と日本人類学会、日本常民文化研究所、そして文化財保護委員会が連名で『民俗博物館はなぜ必要か』という小冊子（民博図書室に所蔵）を刊行している。これは、1950年に文化財保護法が制定されたのを契機として、博物館コレクションが文化財として位置づけなおそうと試みられたことを示す。じっさい、日本民族学協会は日本人類学会と共同で1953年に「国立民俗学博物館設置方に関する建議書」を文化財保護委員会に提出しており、日本常民文化研究所と日本民俗学会も同様の建議をおこなっている（丸山 2013）。

コレクションは、戦後もひき続き成長していった。日本全国からの寄贈も多いが、海外資料が充実したのもこの時期の特徴である。1954年には、コペンハーゲンのデンマーク国立博物館と資料交換をおこなった結果、91点のグリーンランド資料がコレクションに加わった（無記名 1955）。1957年から1958年にかけては、民族学協会がおこなった第1次東南アジア稲作総合調査団の収集資料として、タイ、ラオス、カンボジアからの資料が登録されている。また、1958年に同じく協会が派遣した西北ネパール探検隊の収集資料、1960年の第2次東南アジア稲作総合調査団（インドネシア）の資料などもある（中村 1984）。

しかし、国立博物館設立の建議は採択されぬまま、1962年に保谷民博は閉館した。資金不足と施設老朽化が直接の理由だという<sup>5)</sup>。同時に、国立の博物館が設立されたあかつきにコレクションをそこに収めることを条件として、コレクションすべてが日本国に寄附されることになった。コレクションは、東京都品川区豊町にあった文部省史料館の収蔵庫に移され、民博に移管されるまでの13年間、ここで眠ることになる。その間、1972年の改組により、コレクションの管理主体は国立国文学研究資料館史料館と呼ばれるようになった。本書で対象とするコレクションが「旧文部省史料館資料」と呼ばれるのはこのためだが、文部省史料館や国立国文学研究資料館史料館は博物館設立までの仮住まいにすぎないので、適切な名称とはいえない。そこで本書では、同じものを「財団法人日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料」と呼ぶこととした。

なお、文部省史料館への移管が完了した翌年の1963年には、コレクションと学会の庇護者だった渋沢が他界した。渋沢とともに成長したコレクションが、渋沢とともにいったん休眠したのである。おそらくこのことが関係しているのであろう、コレクションをひき継いだ民博の職員にも、民博が渋沢から遺志を継いだと考える者が少なくない。

### 3. 関連プロジェクトの経緯 — 1975年から2016年まで

すでに述べたとおり、コレクションは1975年に三たび民博に移管された。そして40年

間、コレクションに属する多くの資料が常設展示や特別展示、企画展示などに活用されてきた。しかしながら、3度（1942年の日本民族学協会発足時を含めれば4度）の移管を経験してきたこともあり、また民博への移管が開館準備の繁忙期に重なったこともあり、記録が不備な点も少なくない。その詳細は第2章で紹介することになるだろう。かいつまんでいえば、資料管理原簿と資料との対応が見つからないものがあり、開館後にそれが判明して大方の資料より遅れて登録されたり、正式な登録をおこなわないまま研究用資料として保管されたりしたものがあるのだ。なかには、移管されたときにひとまとまりとして扱われていた資料が、移管後に分散してしまい、異なる複数の資料として登録されたり、一部が登録され一部が未登録になってしまったというケースもある。

こうした未整理ないし不完全な整理の状態の資料を、故・近藤雅樹教授は、地道な努力によって追跡しつづけてきた（近藤 2010）。残念ながら、近藤教授が2013年に物故したことにより、整理作業は中断を余儀なくされた。今回、近藤教授を中心に整理を進めるなかでわかった新情報を公開し、資料活用の促進に資するというのが、本書の目的である。とくに、文部省史料館から民博に移管されたさいに登録されなかった資料について、10年あまりの調査でわかったことを明らかにする。

ここでいう10年あまりの調査、すなわち本書の刊行に至るまでの経緯を述べておきたい。もっとも初期には、近藤教授が実施した民博の共同研究「アチック・ミュージアム・コレクションの研究」（1999～2000年度）がある。しかし、本書にとってより重要なのは、共同研究の成果として近藤教授が企画・実施した2001年春の特別展「大正昭和くらしの博物誌—民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム」であろう（近藤 2001）。この特別展は、渋沢敬三とその同志であるアチックミュージアム同人が集めた資料で構成したものである。資料の収集年代は1920年代から30年代にわたっており、民博が継承したものの中でもっとも古い部類に属する。

この特別展の準備をつうじて、近藤教授は、上述した未登録資料が収蔵庫内に保管されていることを知った。このため、特別展開催中に発足した共同研究「アチックミュージアム・コレクションの形成過程に関する研究」（2001～2002年度）であらためて問題提起をおこない、未登録の資料に仮番号をつけて整理作業をおこなってきた。これらの資料にはXで始まる仮番号をつけたので、共同研究者の参加者らはこれを「X番号資料」と呼びならわしてきた（第2章、第3章を参照）。

資料整理の実作業は、さまざまなプロジェクトを立ちあげて経費を獲得しながら進められた。そのすべてを列挙することは現段階ではできないが、一例をあげれば、渋沢敬三没後50年記念事業のために一般財団法人MRAハウスからの助成を得た「『渋沢敬三没後50周年記念』を冠した特別企画展示の実施」（2010～2013年度）や、民博の文化資源プロジェクトとしておこなわれた「アチックミュージアム・コレクションの全容公開促進プロジェクト」（2007年度）、類似する事業枠である文化資源計画事業としておこな

れた「旧民族学博物館所蔵資料の調査と整理・登録」（2011年度）などをあげることができる。これらのプロジェクトの成果は、近藤教授が企画・実施した2013年秋の特別展「渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」でも公開されたが、作業で明らかになった情報のほとんどは公開されないままになっていた。

本書は、いまだに残されているその解明作業に筋道をつけ、研究を含む資料利用の利活用に寄与しようとするものである。本書刊行を見すえた資料整理においては、文化資源プロジェクト「アチックミュージアム旧蔵資料の体系的整理と資源化」（2015年度）の経費を利用させていただいた。また、コレクションの名称や歴史的な位置づけを考証するにあたっては、フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「日本民族学会附属民族学博物館（保谷民博）資料の履歴に関する研究と成果公開」（2016～2017年度）での議論を参考にさせていただいた。

#### 4. 本書の構成

本書においてもっとも重要な部分は、整理事業によって素性が明らかになった資料の一覧である。これは第3章「保谷民博から民博に移管されながら未登録だった標本資料の履歴解明」（朝倉敏夫・横山智之）としてまとめた。この章には、長大な2つの表が付されている。その第一は、近藤教授が生前に始めた資料原簿調査から明らかになった、未登録資料についての新情報である。ここでいう資料原簿とは、保谷民博が作成して現在は神奈川大学日本常民文化研究所がひき継いでいる『民具標本収蔵原簿』（保谷原簿）である。未登録資料に付されていたラベルや付札の番号などから、その資料についての記載が保谷原簿のどの部分に相当するかを同定し、そのことによって資料の素性を明らかにしていった。これによって素性が明らかになった資料は、合計587点である。

第二の表は、近藤教授物故後の2015年夏に民博の収蔵庫内から再発見された資料整理カードにもとづくものである。このカードには、保谷原簿における整理番号（保谷番号）が記入されているだけでなく、資料の全体を写した写真が貼付されていたため、番号について手がかりがない未登録資料を同定するうえで貴重な根拠となった。この結果、未登録だった47点の資料について新情報がわかり、登録できるようになった。

作業結果を示す膨大なこの資料集が、本書の概要をなすことには変わらない。しかしながら、本書ではこの資料集に先んじて第2章「保谷民博旧蔵資料の全容」（木村裕樹・吉田晶子・横山智之）を置き、第3章の資料同定作業の基礎となる作業の過程と結果を示した。それは、半世紀近く前に整理されたと思われる保谷原簿をひとつの表計算ソフト（Excel）に入力し、電子的に検索できるようにするという作業だった。その結果、保谷民博で管理されていた資料のうちどれくらいの割合が登録され、どれくらいの割合が未登録であるかが推定できるようになった。この調査は、枚方市立鑄物民俗資料館に勤

務しながら近藤教授の共同研究に参加していた吉田晶子氏（故人）が始めたもので、資料原簿調査の具体的な作業を研究会レジュメや雑誌論文などのかたちで残していた。その調査を補佐し、表計算ソフトを駆使した膨大なデータベースを構築したのが横山智之氏である。2人の記録と証言にもとづき、近藤教授の指導学生として作業を身近に観察していた木村裕樹氏が、本書のために経緯を詳しく記すことになった。

## 5. 将来にむけて

近藤教授を中心とするチームの努力により、多数の未登録資料の素性が明らかになった。しかし、収蔵庫にはなおX番号が付された未登録資料が残っているし、民博の登録資料には対応しない資料管理原簿の記述も依然残っている。こうした不明点の解明が望まれることは言うを俟たない。しかし、全貌の解明にはなお多くの時間がかかると予測される。今回の作業をふまえ、解明のためにさまざまな角度から地道な努力を続けることが必要である。

そうした努力のなかには、民博外の利用者から寄せられるさまざまな情報の集積と整理がある。近藤教授は、2001年に特別展を開催したとき、渋沢敬三の人間関係に関わる情報提供を来館者に呼びかけ、館の支援にも頼らず自力で情報を集めてきた。目まぐるしく配置換えがおこなわれる部局にこうした情報管理を任せていては、情報が散逸してしまうと恐れたらしい。しかし皮肉なことに、情報管理を一手にひき受けてきた近藤教授の物故により、この情報提供ネットワークは機能しなくなってしまった。個人情報をも含むさまざまな情報のひき継ぎという課題は、博物館にとって宿命ともいえる大きな課題であり、だからこそ本書の刊行も必要となったのである。民博を博物館ならぬ博「情報」館と謳いあげた初代館長 梅棹忠夫の初志をはたすためにも（梅棹 1987: 43）、この問題にはひき続き真剣なとり組みが必要だろう。そのさきがけとして、民博はすでに、フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「日本民族学会附属民族学博物館（保谷民博）資料の履歴に関する研究と成果公開」（2016～2017年度）に着手している。このプロジェクトが完了すれば、コレクションの全貌が把握しやすくなると同時に、失われた履歴の解明も順次進んでいくと期待できる。

最後に、本書の刊行により実現した情報集約をふまえて、あらたな情報廃棄または忘却がおこなわれようとしていることを、明記しておかなければならない。本書刊行の背景のひとつとして、近藤教授が継続してきた整理作業をそのまま民博が継承できなくなっているということがある。近藤教授の物故後も、この作業のために民博4階の一室があてがわれ、本書刊行の準備が続けられてきた。その書架には、近藤教授の蔵書や写真スライドがところ狭しと並んでいる。書架の数段にわたって並んでいるクリアファイルは、保谷民博旧蔵資料の1点1点に付されていた荷札で、廃棄されかけたところを近

藤教授が救いあげ、番号順に整理したものである。こうした資料群の情報は、本書の刊行によって複写を終えたものとみなされる。一部は館がひき取り、一部は遺族にお返しし、一部は廃棄しなければならないかもしれない。さもなければ、この部屋は情報に埋もれてしまって、結局は役に立たなくなってしまうだろう。

あらたな情報の発見と古い情報の忘却をくり返ししながら、われわれは知識の生産に従事している。すべての情報を救い出すことはできず、本書の刊行によって、われわれはまた忘却を強要される。これはある意味しかたがないことで、そうしないと新しいものも見えなくなってしまうのである。そのことを肝に銘じながら、ときには忘却されたものの発掘にまた向きあいつつ、博物館という記憶装置のなかで永遠に終わらない務めをはたしていかねばなるまい。

## 謝 辞

数多くの関連プロジェクトにご参加くださった皆さまにお礼申し上げます。本来ならば近藤教授に確認しながらお名まえを記すべきところ、教授が故人となってしまわれたいま、遺漏があってはかえって失礼と判断し、お名まえをあげるのは控えさせていただきます。お2人だけ、近藤教授のもとでさまざまな作業をこなしながらも本書では共著者としてお名まえをあげられなかった浦川慶子氏と岡田祐子氏に、記してお礼申し上げます。

## 付 記

本書は、直接的には、2015年度に進められた民博の文化資源プロジェクト「アチックミュージアム旧蔵資料の体系的整理と資源化」の成果である。館内メンバーとしては朝倉敏夫（民族社会研究部）、野林厚志（文化資源研究センター）、飯田卓（先端人類科学研究部）、齋藤玲子（民族文化研究部）、太田心平（民族社会研究部）が、館外メンバーとしては木村裕樹（龍谷大学社会学部非常勤講師・国立民族学博物館外来研究員）が参加し、資料整理の方針を討議した（所属はいずれも2015年当時のもの）。整理の実務は、保谷原簿の内容を表計算ソフトに入力した横山智之がひき続き担当した。

本書を、鬼籍に入られた近藤雅樹教授と吉田晶子氏に捧げます。

## 註

- 1) この当時、博物館の名称はけっして安定していない。一般財団法人宮本記念財団（渋沢敬三のもとで民具研究を推進した宮本勢助・馨太郎父子の業績を記念する財団）に残された資料台帳には「日本民族博物館」という名称が印刷されており、同じく宮本記念財団に残された陳列品目録の表紙には「附属民族学博物館」でなく「附属博物館」と印刷されている（齋藤玲子氏の私信）。また、日本民族学会の学会誌『民族学研究』では、博物館の新築を「本学会附属研究所陳列館の建築」という見出しで伝えており、博物館を研究所の下位部局とみなしていたらし



いこと、また「民具土俗品陳列所」という名称も使われていたことがわかる（無記名 1938; 野林 2010）。戦後になると、博物館の経営母体は日本民族学会から日本民族学協会に変わるが、博物館の名称は「附属民族学博物館」に統一されて安定する。

- 2) 本書では、保谷民博が閉鎖された1962年頃の名称（財団法人日本民族学協会附属民族学博物館）を、コレクションを有した保谷民博の正式名称として採用している。これは、この時期がコレクションの完成時期にあたり、またこの時期に博物館名称が定着して、表記ゆれがほとんどみられなくなるためである。
- 3) 横浜市歴史博物館（2002: 136）の展示解説は、日本民族学会から日本民族学協会への「移管」の時期を1943年でなく1944年としており、そのための準備として資料点検作業が始まったのが1943年だと述べている。本文では、財団法人日本民族学振興会（1984）の記述に従った。いずれにせよ、1942年の日本民族学協会設立よりもタイミングが遅いのは、渋沢が自費による博物館運営を構想しており、すぐに寄贈を決断しなかったためらしい。

そのことと関わるのかどうかかわからないが、上記の事実とともに今後解明すべき課題として、戦前に企画された民族（学）博物館設立構想の詳細がある。通常、博物館設立の構想は、1936年に文部大臣宛てで提出された「皇紀二千六百年記念日本民族学博物館設立趣意書」に関わるものとして述べられることが多いが（刈田 2002; 丸山 2013）、小冊子『民俗博物館はなぜ必要か』（民博図書室に所蔵）14ページには、その後に出された別の構想についても述べられている。それは、1940年に政府が計画した国史館の一部を民族学関係の博物館にするという構想である。

2回めの構想が1944年頃に挫折したために、渋沢が日本民族学協会への最終的なコレクション寄贈を決断したとすれば、前後のつじつまが合う。しかしその経緯の詳細は明らかでないため、今後の研究課題としたい。

- 4) コレクションの疎開に関して、筆者はかつて、「[1945年] 7月には、収蔵品を彦根工業専門学校へ疎開させた」と述べたことがある（飯田 2014: 264）。しかしこれは筆者の誤解で、疎開させたのは民具資料でなく、霊南坂にあった日本民族学協会や民族研究所（官立）の書類や図書類だったようだ（宮本・梅棹 1978）。記して訂正する。
- 5) 保谷民博の閉鎖については、記録がきわめて少ない。日本民族学協会の学会誌『民族学研究』では、1955年から1957年にかけて、巻末の「資料と通信」欄に「民族学博物館だより」（または「博物館だより」）のコーナーを随時設けていたが、編集方針の変更のためか1960年代の号にこのコーナーはみられず、保谷民博の閉鎖についても記録がない。この頃に日本民族学協会に勤務していた文筆家の記録によると、文部省史料館への資料移管がおこなわれたのは1962年12月1日だという（堀江 2003）。ただし文部省史料館では、受け入れた民族資料の収蔵庫が東京都大田区戸越に落成した1963年5月9日を資料移管の日付と考えているようである（岡・宮本 1963; 国文学研究資料館史料館 1991）。

## 文献

飯田卓

- 2014 「昭和初期の公共視覚メディア——渋沢民具学における映画と博物館」『アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象 [論文編] (国際常民文化研究叢書10)』pp.245-267, 神奈川: 神奈川大学 国際常民文化研究機構。

岩井宏實

2011 『民具学の基礎』東京：慶友社。

宇野文雄

2000 『みんぱくコレクション (みんぱく発見2)』大阪：国立民族学博物館。

梅棹忠夫

1987 『メディアとしての博物館』東京：平凡社。

大谷明史

2015 『渋沢敬三と竜門社—『伝記資料編纂所』と『博物館準備室』の日々』東京：勉誠出版。

岡正雄・宮本常一

1963 『会長渋沢敬三先生の逝去』『民族学研究』27(4): 606。

刈田均

2002 『集める・調べる・活用する—渋沢敬三の学究活動』『民具マンスリー』35(7): 20-25。

国文学研究資料館史料館

1991 『史料館の歩み四十年』東京：国文学研究資料館史料館。

国立民族学博物館編

1984 『国立民族学博物館の十年』大阪：国立民族学博物館。

国立民族学博物館監修

2013 『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 ATTIC MUSEUM』京都：淡交社。

近藤雅樹編

2001 『大正昭和くらしの博物誌—民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム』東京：河出書房新社。

近藤雅樹

2010 『渋沢敬三と民族学博物館』西東京市・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会編『渋沢敬三・高橋文太郎と民族学博物館—保谷にあった日本初の野外展示をもつ民族学博物館』西東京市・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会。

財団法人民族学振興会編

1984 『財団法人民族学振興会 五十年の歩み』東京：財団法人民族学振興会。

佐藤健二

1987 『渋沢敬三とアチック・ミュージアム』川添登・山岡義典編『日本の企業家と社会文化事業—大正期のフィランソロピー』pp.124-143, 東京：東洋経済新報社。

佐野眞一

1996 『旅する巨人—宮本常一と渋沢敬三』東京：文藝春秋。

渋沢雅英

1966 『父・渋沢敬三』東京：実業之日本社。

鈴木正崇

2010 『『澁澤民間学』の生成』『神奈川大学国際常民文化研究機構年報』1: 170-182。

中村俊亀智

1984 『アチック・ミュージアムのあとに—財団法人日本民族学協会附属博物館のこと』『国立民族学博物館研究報告』9(1): 41-58。

額田巖

1953 『結びの文化 (民族学博物館学生文庫3)』保谷：民族学博物館。

野林厚志

- 2010 「研究のための博物館資料の収集調査—馬淵東一が台湾原住民族の物質文化によせた社会人類学的関心と歴史人類学的関心の二つの側面」笠原政治編『馬淵東一と台湾原住民族研究』pp.135-170, 東京：風響社。

堀江朋子

- 2003 『白き薔薇よ—若林つやの生涯』図書新聞。

丸山泰明

- 2013 『渋沢敬三と今和次郎—博物館の想像力の近代』東京：青弓社。

宮本馨太郎

- 1952 『紡織技術（民族学博物館学生文庫1）』保谷：民族学博物館。

宮本馨太郎・梅棹忠夫

- 1978 『屋根裏から民博へ』梅棹忠夫編『民博誕生—館長対談』pp.177-196, 東京：中央公論社。

宮本常一

- 2008 『渋沢敬三（宮本常一著作集50）』東京：未来社。

無記名

- 1938 「本学会附属研究所陳列館の建築」『民族学研究』4(3): 226。

- 1955 「民族学博物館だより デンマーク国立博物館との資料交換」『民族学研究』19(2): 172-173。

- 1957 博物館だより」『民族学研究』21(4): 319-322。

横浜市歴史博物館

- 2002 『屋根裏の博物館—実業家渋沢敬三が育てた民の学問』横浜：横浜市歴史博物館。

吉田憲司

- 1999 『文化の「発見」—驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』東京：岩波書店。